

小牧山で出会った野鳥たち

～小牧山の自然を未来に～

会期 平成28年7月22日(金)～9月14日(水)
※8月18日(木)は休館日

会場 小牧市歴史館3階



モズ (モズ科) 繁殖期はつがい縄張りをもつが、秋から冬はオスもメスも1羽ずつ縄張りをもち、木や電線上などの目立つところで尾を振りながら高鳴きをして縄張り宣言をする。バッタやカエルなどを食べるが、獲物を木の枝などに刺す習性があり「モズのはやにえ」と呼ばれる。



コゲラ (キツツキ科) 1年中見ることができ、日本で一番小さなキツツキの仲間。林や公園など木が多く、太い木のある場所で繁殖する。木の下から上、幹から枝へと移動しながら、木の皮をつついて食べ物の昆虫を探す。繁殖期には木をクチバシでつついてドラミングをする。



シメ (アトリ科) 冬鳥として日本に渡ってくる。エノキやカエデなどの種を太いクチバシで割って食べる。秋冬には群れをつくるが、冬は単独でいることが多く、低地の庭や公園に飛んで来ることもある。姿勢はイカルに似ているが、からだ全体がやや黒っぽい濃い茶色で区別できる。



シロハラ (ヒタキ科) 冬鳥として日本に渡ってくる。アカハラによく似ているが、腹や脇に橙色の部分がない。また、アカハラと同じようにして、昆虫やミミズを食べるが、センダンや柿などの木の実もよく食べる。



ハシボソガラス (カラス科) ガーガーと濁った声で鳴き、左右の足を交互に出しながら歩く。



ハシブトガラス (カラス科) カアーカアーと澄んだ声で鳴き、両足をそろえピョンピョン歩く。

ヒタキ科	アトリ科	カラス科	キツツキ科
ツグミ アカハラ オオルリ ジョウビタキ トラツグミ ウグイス キビタキ コサメビタキ ルリビタキ シロハラ	イカル カワラヒワ アトリ シメ	カケス ハシボソガラス ハシブトガラス	アカゲラ コゲラ
	ワシタカ科	シジュウカラ科	セキレイ科
	ノスリ トビ	ヤマガラ シジュウカラ	ハクセキレイ ビンズイ
	メジロ科	ハタオリドリ科	ハト科
	メジロ	スズメ	キジバト
モズ科	エナガ科	ヒヨドリ科	
モズ	エナガ	ヒヨドリ	

今回紹介しました「小牧山で出会った野鳥たち」を左の表のように分類してみると、ヒタキ科が10羽と一番多く、アトリ科、そしてカラス科の順番になることがわかりました。



ジョウビタキ



オオルリ



ノスリ



メジロ



キビタキ



イカル



シジュウカラ



コゲラ

ごあいさつ

小牧山は濃尾平野にポツンと出現する小高い山。街の中にならびながら豊かな自然に恵まれ、市民の憩いの場となっていますが、野鳥たちにとっても憩いの場になっています。小牧山はカラスとハトが目立ちますが、色鮮やかなかわいらしい鳥や、ノスリやトビなど大きい鳥、今回は紹介していませんが、フクロウの仲間のアオバズクなど、よく見ているとこんなに多くの鳥たちがやってきました。

今回の企画展は、自然観察指導員の清水 豊氏にご協力をいただき、「小牧山で出会った野鳥たち」というテーマで写真展を開催いたします。

パネルの説明文の下に♪と番号をつけて鳴き方が表示してあるものは、その番号順に鳴き声が聞こえてきます。パネルを参考に聞いてみてください。

未来も多くの野鳥たちがやってくるような自然豊かな小牧山をみんなで大切に守っていきましょう。

最後に、この写真展にご協力いただいた方々に衷心より感謝いたします。

協力者：自然観察指導員 清水 豊 氏

参考文献

「広辞苑 第三版」編者：新村 出

発行所：株式会社岩波書店 1983年

「新明解国語辞典 第二版」

編者：金田一京助 金田一春彦

見坊豪紀 柴田武 山田忠雄

発行所：株式会社三省堂 1974年

「学習科学図鑑 鳥」

編集人：志村 隆

発行所：株式会社学習研究社 新訂版

2009年

平成28年度小牧市歴史館ジュニア企画写真展

「小牧山で出会った野鳥たち」

編集 小牧市教育委員会文化振興課文化財係

〒485-8650 愛知県小牧市堀の内三丁目1番地

TEL (0568) 76-1189

小牧市施設活用協会

〒485-0822 愛知県小牧市大字上末2233番地2

TEL (0568) 79-7715



イカル(アトリ科) 山地の広葉樹林で繁殖するが、秋冬には暖地や山のふもと・丘陵に移動する。越冬期には数羽から数十羽の群れで行動し、エノキやカエデの種、昆虫などを食べる。黄色く大きなクチバシが目立つ。



ツグミ(ヒタキ科) 夏はシベリア、樺太に住み、秋に群れで日本に渡ってくる冬鳥。食べ物の多い場所では群れのままでいることもあるが、暮れまで一羽で過ごすツグミも多い。春になり、再び北の方に帰る直前、しきりに鳴く。雑食性である。



アカハラ(ヒタキ科) 夏は山地で繁殖するが、秋には丘陵や平野に移動する。地面を跳ねて歩き、落ち葉などをクチバシではねのけ、昆虫やミミズ、小さな果実を食べる。



オオルリ(ヒタキ科) 山地や丘陵で繁殖する夏鳥。谷間の上空でチョウやアブなどを飛びながらキョウキョウする。ウグイスやコマドリと並んで日本三名鳥といわれるほど鳴き声美しい。春秋には市街地の公園などに姿を見せることもある。



カワラヒワ(アトリ科) 平地や低山の林や畑、市街地の街路樹や公園、河原などに生息し、草の実や昆虫を食べる。秋冬は河原や田畑に群れになって住む。



ジョウビタキ(ヒタキ科) 冬を越すため、シベリアや中国大陸などから日本にやってくる渡り鳥。オスとメスで翼の色が違うが、両方とも翼の真ん中に白い斑点があり、着物の模様(紋)に見たてて紋付き鳥とも呼ばれる。オスは顔と翼(上着)が黒く、グレーの帽子(頭の部分)をかぶり、オレンジ色の服(おなかの部分)を着たようなダンディな姿をしている。



トラツグミ(ヒタキ科) ツグミ類では最も大きく、黄色がかった茶色のからだに黒みがかった茶色のうろこ模様が特徴的な鳥。クチバシで落ち葉をはねのけ、ミミズや昆虫を探す。地上をすばやく移動し、ピョンピョン跳ね歩く。



スズメ(ハタオリドリ科) 私たちが一番よく見かける鳥。昔からコメ作りが盛んだった日本では、コメを食べてしまう害鳥とされてきた。その一方で、田や畑の作物に被害を与える虫を食べしてくれる益鳥でもある。



ノスリ(ワシタカ科) シルエットがすんぐりとしたタカの仲間。夏は山地に住み、秋冬には平地や暖地に移動し全国的に見られる。草地や田畑、川原などの開けた場所で、地上にいるネズミやカエル、ヘビ、昆虫など、さまざまな動物を捕まえて食べている。



ハクセキレイ(セキレイ科) 最もよく見かけるセキレイの仲間。水辺近くの田畑や市街地などに住み、尾を上下に振りながら歩き、昆虫などを飛びながらキャッチして食べる。白い顔の目のあたりに黒い線があるのが特徴である。



メジロ(メジロ科) 真冬の寒い時期に集団で飛ぶのを見かける、黄緑色をしたスズメより小さな鳥。繁殖期が過ぎると、5から15のつがいが集まって10羽から30羽ほどの群れをつくる。「目白お押し」とは、メジロの習性から生まれた言葉である。



ヒヨドリ(ヒヨドリ科) 茶色と灰色がベースの鳥。特徴のある声で鳴き、細いからだのどこからこんな声が出るかと思うほどの鳴き声の大きさである。ヒヨドリは甘いもの好きで、梅や桜、椿などの花の蜜を吸いにやってくる。



ウグイス(ヒタキ科) 春告げ鳥として古くから愛され、和歌にも詠まれた。さえずるのは縄張り内を見張っているオスで、「ホーホケキョ」は他の鳥に対する縄張り宣言である。「ケキョケキョケキョ」は谷渡りと呼ばれ、敵への威嚇とされており、メスはこれを合図に安全を確保する。



カケス(カラス科) 秋が深まると数羽から十数羽の群れで、低地や暖地に移動して冬を越すものも多い。秋にはドングリや柿の実などをよく食べる。このドングリを冬に備えて落ち葉の下などに貯える習性がある。翼の青色の部分と白い斑点の部分が目立つ。



キビタキ(ヒタキ科) 山地林で繁殖する夏鳥。昆虫が飛んでくると飛びながらキャッチする。春秋には、市街地の公園などに飛んでくることがある。メスは緑がかった茶色で、オスは眉・胸・腹が黄色く、翼の白い斑点が目立つ。



コサメビタキ(ヒタキ科) 平地で繁殖する夏鳥。飛び回りやすい空間のある雑木林がお気に入り、林の中で飛んでいる昆虫を見つけると、パッと飛び立ち空中で昆虫を捕らえ、もとの枝にもどる。



ヤマガラ(シジュウカラ科) 1000年を超える飼育の歴史があるヤマガラ。かつては芸をする鳥の代表であり、昭和の半ば頃は、神社の縁日などでおみくじをひいてくれる姿を見ることができた。大きな声で鳴く、赤みがかったオレンジ色でカラの仲間。



〈オス〉



〈メス〉

ルリビタキ(ヒタキ科) 1500メートルを超える亜高山帯で繁殖するが、冬には里山に移動する。オスは名前のとおり、頭から背中にかけてルリ色でおなかは白色。メスは頭から背中にかけては暗い黄色で、尾と羽根が淡いルリ色。両方とも脇が淡いオレンジ色になっている。



シジュウカラ(シジュウカラ科) 低地から山地まで広く生息し、街でも木のある場所なら見ることができる。枝から枝へ飛び回って、蛾の幼虫や木の実などを食べる。頭は黒く、胸にネクタイのような黒い帯がある。翼は灰色がかった青色である。



エナガ(エナガ科) 長い尾にまるいからだ、小さなくちばしが特徴的な鳥。1年中見ることができ、秋冬は数羽から十数羽の群れをつくる。シジュウカラやメジロ、コゲラなどと混じって群れになることもある。



キジバト(ハト科) 山鳩という名で呼ばれる鳥。畑や林などでその姿を見かける一方で、駅や住宅地でもよく見かける。



アトリ(アトリ科) 夏はアジア大陸の中央部へ渡り、冬になると日本各地にやってくる。秋は山地の森林で、群れをつくって木の実を食べる。冬から春は低地に移動し、草の実や落ち穂を食べる。水田地帯に数千から数万羽の大群で現れることもある。



アカゲラ(キツツキ科) 他のキツツキ類と同様に、縦に木の幹を登りながら、クチバシで木の外側の皮をつつき、中にある昆虫類を食べる。オスもメスもおなかの下の部分が赤いが、オスは頭の後ろも赤く、赤いベレー帽をかぶっているように見える。



トビ(ワシタカ科) トンビとも呼ばれる。トビは古くから日本人にとって身近な鳥であり、ピーヒョロロという鳴き声や円を描いて飛ぶ姿が歌になった。トビは小魚や小動物の死骸、昆虫や人間の捨てた食べものなどを食べる。カラスより大きく、翼を広げると1.5メートルにもなる。



ピンズイ(セキレイ科) 山林で繁殖するが、秋に平地の松林などに移動して冬を越す。昆虫やクモ類を捕まえて、ひなを育てるが、秋冬は地上を歩きながら植物の種などを食べる。カッコウ科の鳥に托卵されることもある。